

福祉施設 大震災からの復旧を支えた BDF 燃料

遠野市

松田 賢雄 社会福祉法人 睦会 障害者支援施設遠野コロニー

取材日 2011.9.13

睦会では県の補助を活用してBDF精製機2台を設置し、障害者授産施設石上の園でBDF精製事業に取り組む。原料の廃食油はスーパーなどから買い取り、地元企業や個人に販売している。原料の安定的な調達や品質確保が課題で、睦会遠野コロニーでは市民が自由に廃食油を持ち込める回収所を設置。町内会や婦人会等に協力の輪が広がっている。

3月11日 14時46分

地震が起きた時は自宅にいた。いつもと違う大きな揺れを感じた。家が新築だったせいか、建物自体はほとんど被害はなかったが、自宅の向かいにある保育園は大騒ぎになっていた。すぐに職場である障害者支援施設へ向かったが、着いた時は既に職員が外に施設利用者を避難させていた。お年寄りや車椅子の方などが多くいたが、当時はとても寒く、施設に止めてあった車に避難させ、地震がおさまるのを待った。

施設の中に入ると、自分のデスク周辺は足の踏み場がない程の荒れようだった。施設の壁にはひびが入り、クリーニング用ボイラーのコンクリート製の台座が粉々に砕けていた。

停電が起きた施設では、施設利用者が恐怖に怯えながら不安な時間を過ごしていた。利用者全員に懐中電灯を配布したが、身体が不自由な方がほとんど。暗闇の中トイレに行く事も考え、外に止めてあった車のエンジンをかけてライトを付け、外から施設内を照らすことにした。寒さが身にしみる時期だったので、食堂に発電機を1台、事務所には石油ストーブを1台設置して暖をとった。普段避難訓練は施設で行っていたが備蓄はほとんどなかったので、栄養士の指示で手をかけないで済むカップラーメンやソーセージ、電池等を職員が手分けして買い回った。

夜、誰かが小さなラジオを持ってきた。ラジオから聞こえるニュースに耳を疑った。

「仙台市若林区で遺体が300体あがった」何それ、何を言ってるの、と思った。「津波があった」「多くの人々が行方不明になっている」。外では自衛隊のヘリコプターが飛び立つ音も聞こえてくる。徐々に情報が入るにつれ、常識を超える災害が起きていることが明らかになってきた。施設利用者の命を守らなくてはならないという使命感と共に、保育園で働く妻、郡山や宇都宮にいる娘とも全く連絡がとれず、時間だけが過ぎていった。



大槌町でのボランティア

震災から1週間経った頃、甚大な被害を受けた大槌町にボランティアへ行った。大槌は施設の行事やプライベートでよく訪れていたの、災害前の町並みを知っていたが、この時、人生で初めて「言葉が出ない」という気持ちになった。

印象に残っているのは、道路がどこにあるのかわからなかったことだ。自宅を失い、家があったと思われる周辺で思い出る物を捜していた若いご夫婦と話す機会があった。「アルバムが、自宅があった場所から何百mも離れて見つかった」と聞いた。

現場には生活の生々しさがあった。茶碗や子どもの帽子、冷蔵庫、車が逆さになったり、子どものTシャツが木にかかっていた。「このTシャツを着ていた子どもはどうなっているのか」「この冷蔵庫はどこかの家で3月11日まで使われていたのに」。物から連想されてくるのは「人」だった。安全靴を履いて瓦礫の上を歩いた。トタンでできた屋根は焼けずに残っているが、その下の木は焼けているので、歩くとまるで落とし穴に落ちたように足を踏みはずした。安全靴を履いているのに、足を切ってしまった。案内してくれたおじさんの長靴はボロボロに切れていた。

ガソリン不足の中BDF燃料が大活躍

遠野市内のガソリンスタンドは震災直後から給油のために長蛇の列ができた。同法人内の石上の園ではBDF(使い終わった天ぷら油を利用した環境に優しいバイオ燃料)精製販売を行っていたので、極度の燃料不足の折、BDF燃料を供給してほしいと多くの問い合わせがあった。

「被災地に行きたいが行けない」「発電機を使うのにBDFが欲しい」「釜石市での瓦礫撤去で重機を動かすのにBDFが欲しい」「沿岸と内陸を結ぶ支援物資を運ぶトラック等に燃料を供給して欲しい」など、噂を聞きつけた人達が石上の園に駆け付けた。

施設にも岩手県登録第一号のBDF燃料タンクローリーがあったが、被災地支援への要望を最優先に考え、BDFを供給し続けた。

BDF燃料の今後

今後の課題は安定的な廃食油の調達と品質確保だ。企業努力と共に、この震災で人々が考えるきっかけになってくれればと思っている。市民が自由に廃食油を持ち込める回収所を設置し、町内会や婦人会などの協力の輪も広がってきた。

広く市民の協力を得るためにも、BDFがCO₂削減に貢献できる燃料であることを多くの人に理解してもらうことが大切だと期待している。作業は原料の回収・精製・販売などで、環境保全に取り組みながら障がい者の意欲向上にもつながっている。CO₂を削減することで社会貢献ができ、障がい者の工賃にもつながる有効性の高い事業である。

これから

電気、ガス、水道といったエネルギーに支えられた生活があって、日常生活のもろさを感じた。原子力発電は熱効率も良くコストも安いけれども、人間が100%コントロールできるものでなければ、このような大きな災害が起きた時にとつてもないリスクを伴うということを考えていかなければならない。エネルギーは絶対必要なものだ。必要なエネルギーを安全なもの、環境に良いもので賄っていかなければ、矛盾を伴う。誰もそれに気付かなかった。

この震災を受けて、国民誰もが真剣に考えていかなければならないと思う。この機会を逃したら同じ社会の繰り返しになるだろう。今の世の中に生

きている自分達にも責任がある。常日頃から、継続していく事が大切だ。次世代を生きる人々のためにも後世に対しても責任を感じる。これから、未来あるエネルギーをつなげていくことが大事だ。



撮影：2011.3.18 岩手県大槌町